

イタリア学会
第56回大会 プログラム

2008年10月19日(日)

神戸大学
(文・理・農キャンパス)

会場 神戸大学（文・理・農キャンパス）
瀧川記念学術交流会館2階 大会議室

◆ 開会 10:00

◆ 研究発表I 10:00～12:00

10:00～10:30

1. ジャコモ・ダ・レンティーニが“Più Gente”と呼んだ婦人をめぐって
浦 一章（東京大学） 司会：村松 真理子（東京大学）

10:30～11:00

2. 『デカメロン』における“amore”をめぐる「作者」の言説について
大歳 剛士（東京大学） 司会：伊田 久美子（大阪府立大学）

11:00～11:30

3. アルベルティ『デーフィラ』における曖昧さ
—失恋の物語でもなく、女性への反感の表明でもなく—
仲谷 満寿美（日本学術振興会） 司会：藤谷 道夫（帝京大学）

11:30～12:00

4. ジョヴァンニ・ヴェルガ『罪深き女』における語りの試行
倉重 克明（東京大学） 司会：武谷 なおみ（大阪芸術大学）

◆ 休憩 12:00～14:00

◆ 総会 14:00～15:00

◆ 研究発表Ⅱ 15:00～16:30

15:00～15:30

5. 宗教改革におけるカルニオーラ、トリエステ、フリウリの間の交流
—プリモシュ・トゥルーバルの生誕500周年に寄せて—
山本 真司（東京外国語大学） 司会：北田 葉子（明治大学）

15:30～16:00

6. 慶長遣欧使節通訳兼折衝役 シピオーネ・アマーティ
—手稿『日本簡略記』に見る宗教政治思想—
小川 仁（京都大学） 司会：北田 葉子（明治大学）

16:00～16:30

7. 「行為」としての美学と歴史
—ジョヴァンニ・ジェンティーレ再考—
鯖江 秀樹（日本学術振興会） 司会：小林 勝（東京音楽大学）

◆ 懇親会 17:00～19:00

（会場：瀧川記念学術交流会館1階 食堂）

ジャコモ・ダ・レンティーニが “Più Gente” と呼んだ婦人をめぐって

浦 一章 (東京大学)

イタリア学会第50回年次大会(2002年神戸)では、ジャコモ・ダ・レンティーニの3つのソネット (*Io m'aggio posto in core, Lo viso mi fa andare, Eo viso e son diviso*) をとり上げ、それらが *viso-riso-paradiso* の押韻語の組によって密接に結び合わされた小さなテキスト群(小マクロテスト)を形成することを示した。また、第55回年次大会(2007年東京)では、カンツォーネ *S'io doglio no è meraviglia* を手がかりにジャコモの主要な3つの材源(アンドレアス・カペラヌス、ジャウフレ・ルデル、トリスタン伝説)を明かし、金髪の婦人をテーマにしたテキスト群(そこには上述のカンツォーネに加えて、*Madonna mia, a voi mando, Meravigliosa-mente, Dolce coninzamento, Dal core mi vene* などが関連する)の存在を明らかにした。2つの年次大会で示されたテキスト群は、まさに *Io m'aggio posto in core* に登場する金髪の婦人によって連結されることになろう。このマクロテストをさらに拡張するために、今回の発表ではジャコモのカンツォーネ *Uno disio d'amore sovente* をとり上げる。

このカンツォーネが先行するテキスト群=材源ととり結んだ関係は、主として1) オウィディウス『名婦の書簡』(とりわけ第1書簡)-アンドレアス・カペラヌス『宮廷風恋愛について』、2) キケロ『友情について』-アイメリック・デ・ペギャンのカンツォーネ *Cel qui s'irais ni guerreia ab Amor* (とりわけ17行目以下)-アンドレアス・カペラヌスの2つの系統から把握できる。1)は愛の本質的特徴としての恐れ・嫉妬、2)は愛の不思議な力(あるものを正反対のものに転化したり、2つのものを1つに融合したりする力)に関するものであるが、分析からは、材源の中でアンドレアスが特権的地位を占めていることが明白となる。さらに、ジャコモが *Uno disio d'amore sovente* の中で扱っているテーマは、さし迫った恋人との別れであり、第55回年次大会で指摘した主題と基本的に同じである。ジャコモにあっては、ジャウフレ・ルデルとトリスタンを対立させているのは、恋愛の成就以前と以後ではどちらの方が恋の苦しみは大きいかという視点であったが、*Uno disio d'amore sovente* もやはり恋愛の成就以後の苦しみを

扱っているのである。

Uno disio d'amore sovente において詩人の恋人は、“Più Gente” (=もっとも美しい婦人) という暗号 (senhal) で呼ばれているが、この暗号はマクロテキストに加えるべき別の作品へとさらに視線を導いてゆく。

『デカメロン』における“amore”をめぐる 「作者」の言説について

大歳 剛史（東京大学）

『デカメロン』は伝統的にイタリア語散文の模範として、また短編物語文学の嚆矢として主にノヴェッラの秀逸さが評価され、これらを内包する「額縁」は単なる枠組みとして大きな関心を集めることはなかった。近年の研究では百話のノヴェッラを有機的に結びつけるマクロテストとして『デカメロン』の「額縁」が注目されるようになったが、あくまでもノヴェッラの語り手である十人の男女の物語を対象としており、さらに外側の物語レベルにおける恋する「作者」が「読者」である恋に苦しむ女性たちに向けた言説についてはまだ十分に研究されているとは言いがたい。本発表ではこのような“amore”を主題とする「作者」の言説と作品全体との関係の分析を試みる。

序論において「作者」は友人の言葉に慰められて恋の苦しみを乗り越えたという自身の経験を語り、同じように恋に苦しむ女性たちの慰めとして『デカメロン』を執筆する。作品は「娯楽」を提供することで彼女たちの憂鬱を解消し、その上で「有益な教訓」を与えることを目的としている。しかし、一見不道徳な内容を多く含む『デカメロン』のノヴェッラがどのように恋に苦しむ女性たちにとって有益たりうるのかは明らかでない。

これには第4日目導入における「作者」の“amore”に対する見解を考慮に入れる必要がある。彼は、外界から隔離された禁欲的な環境で育てられたが、世間に出た途端女性の魅力に捉えられてしまった Filippo Balducci の息子のエピソードを例にして、“amore”を人間の自然な本性と定義し、これを抑圧することは無意味であると批判する。ただし、これは決して“amore”の無秩序な解放を意図しているわけではない。『デカメロン』には猥雑なノヴェッラが数多く含まれているが、「作者」は結びにおいてノヴェッラから教訓を得るか悪い手本を見出すかは読む者の心がけ次第だと述べている。語り手たちも、いくつかのノヴェッラの不道徳さを認識しながら、娯楽のためとわきまえた上でこれらを語っており、自分たちの倫理観に外れた行動そのものに賛同することはない。『デカメロン』において、“amore”は自然な欲求として肯定されつつも、その適用には慎

重さと分別が求められているのである。実際、第4日目の不幸な恋を題材にしたノヴェツラに見られるように、“amore”は時として恋人たちを“follia”へと導く危険をはらんでいる。

結びの言説からわかるように、「作者」の“amore”に対する態度はFilippo Balducciのそれとは正反対である。彼は、室内に籠り世間から遮断されている「読者」の女性たちにノヴェツラを通じて世の中の多様な現実を包み隠さず提示し、その上で主体的な判断によって善悪を見分けるように示唆している。

ここで重要になるのがノヴェツラの語り手たちである。語り手の中心は女性だが、「読者」の女性たちに非常に近い存在といえる。いずれも市民社会の上流に属し、恋をしている。また、一方はペスト、他方は恋によって生じた憂鬱を解消する必要に迫られている。語り手たちはペストからの避難生活においてノヴェツラを始めとする様々な娯楽を享受しながら、それによって退廃的にならず、道徳規範を守って行動している。彼らの理性的な判断は「読者」の女性たちの学ぶべき模範となる。さらに、彼らが交わすノヴェツラの内容についての議論は「読者」の女性たちのノヴェツラ解釈の手がかりとなる。

「読者」の女性たちはノヴェツラという「娯楽」によって恋の苦しみを紛らわすが、同時に語り手たちの物語レベルから「有益な教訓」を引き出すことができる。『デカメロン』の多層的な物語構造において一見その役割が明確ではない「作者」の言説だが、このようにノヴェツラとそれを語る語り手たちの物語に密接に結びついているのである。

アルベルティ『デーフィラ』における曖昧さ —失恋の物語でもなく、女性への反感の表明でもなく—

仲谷 満寿美（日本学術振興会）

レオン・バッティスタ・アルベルティ（1404～1472年）が24歳のときに書いたとされる「Deifira」（『デーフィラ』、1428年）は、執筆直後から広く読まれ、著者が存命中の1471年に初版が出た。この小品はルネサンス期にはアルベルティの諸作品の中でももっとも頻繁に印刷された。

愛を主題とする『デーフィラ』は、恋に病み失恋を嘆くパッリマクロと、彼を慰める友人フィラルコとの対話という、古典文学以来のおなじみの設定で書かれている。しかし、恋人にありがちな思い違いを指摘し、恋愛のコツを指南し、愛の痛手から立ち直る方法を教えさすフィラルコの発言と、何を言い聞かされようとも失恋の嘆きの堂々巡りをつづけるパッリマクロの発言は、まったく噛み合っていない。二人の間には本当の意味での会話は成立していないし、議論の展開にも一貫性がない。曖昧な作品と評されるゆえんである。

この曖昧さは解釈の自由をもたらしした。一例として、アントーニオ・デ・マニョーリによる『プリドーロとフィロメーノの物語』（1430年代）が挙げられる。マニョーリは自分の恋人ジネーヴラに取り入るという個人的な目的で『デーフィラ』を書き換えた。このヴァージョンでは、胸中を縷々述べたてるフィロメーノ（原作のパッリマクロ）が主役となる。原作と異なりフィロメーノは妻帯者であり、対話の中の対話に登場する妻は慰める友としての役割をも引き受ける。ポリドーロ（フィラルコ）の影が薄くなったぶん、フィロメーノの愛情の強さが強調される。マニョーリはこの物語の中に、ボッカッチョの『フィアンメッタ』と『ピーノ・デ・ロッシへの慰め』からの引用をも差しはさんだ。『フィアンメッタ』に馴染んでいたであろう15世紀の女性の読者たちにとっては親しみやすい改変だったにちがいない。この物語は7つの写本で伝えられ、20世紀前半にもなお『デーフィラ』そのものの解釈に影響を及ぼした。

他方、『デーフィラ』に散見される「misoginia」（女性に対する反感）を重視する読み方もあった。たとえば、マーリオ・エクイーコラは『愛の性質について』（初版1525年）において、愛を非難する代表的な4つの作品として、バッティス

タ・フレゴースの『アンテロス』、ブラーティナの『愛について』、ピエートロ・エドの『アンテロティカ』とならんで、『デーフィラ』を挙げている。さらに興味深いのは、ベルナルディーノ・コーリオの『愛についての有益な対話』（初版 1502 年）である。彼は『コルバッチョ』からの引用を織りまぜながら、『デーフィラ』をロンバルディア方言で書き変えた。このヴァージョンは、チッレーニア（原作のデーフィラ）のつれなさを嘆くニチェラート（原作のパッリマクロ）がエウフィロ（原作のフィラルコ）と二人で深い谷間に降りて語り合っているのを、自らも愛に苦しむ著者コーリオが盗み聞きして書き留めたとされる。コーリオは彼自身の恋人に呼びかけているが、真の読者は同時代のミラノの人文主義者たちであり、この対話では「misoginia」が殊更に強調されている。

アルベルティは『デーフィラ』において、愛についての対話という新しい文学ジャンルの創出を試みた。だが、同時代の読者たちは、失恋を嘆く物語、あるいは人文主義者たちのお気に入りの「misoginia」を基調とする反恋愛論として、安易な解釈に流れた。（以上、S. Cracòlici に基づく）。愛についての対話というジャンルが（フィチーノの哲学書などは例外として）文学として継承され発展するのは、ベンボの『アーゾロの談論集』（初版 1505 年）以後のことになるだろう。

ジョヴァンニ・ヴェルガ『罪深き女』における語りの試行

倉重 克明（東京大学）

イタリアの文学運動ヴェリズモの作家ジョヴァンニ・ヴェルガ（1840～1922）は、その文学的キャリアを歴史小説から始めた。以降ヴェルガは、没個性的語りへと至るまで種々の語り的手法、とりわけ語り手の機能と位置付けについて模索し続けた。

歴史小説『山の炭焼き党员』*I carbonari della montagna*（1861～62）、及び『干潟にて』*Sulle lagune*（1863）における語り手は、作者と同一化し、作品の構成要素全てを読者に説明する「全知の語り手」として表れる。語り手は場面ごとにその役割を変化させて、テキスト内でその位相を安定させることはない。

第三作目の小説『罪深き女』*Una peccatrice*（1866）において、ヴェルガは前二作品とは異なる語りを提示した。主題に関しては、それまでの愛国主義的歴史小説から、恋愛感情を中心とする心理が扱われるようになる。この作品以後、中・上流階級の生を描いた「上流社会作品群」“Ciclo mondano”に含まれる『エロス』*Eros*（1875）に至るまで共通して描かれるのは、人を破滅あるいは死へと突き動かす情動である。同時に、ヴェルガは『罪深き女』において、より確固たる語り手を作品内に措定しようとした。本発表では、主に語り手の機能という視点から、ヴェルガが本作品において前二作品の手法上の課題をいかに整理し解消しようとしたか、そしてどのような課題が後続作品に持ち越されたかを明らかにしたい。

『罪深き女』の序章においては、語り手「私」が友人ライモンドから聞き知ったピエトロとナルチーザの恋物語を小説化する経緯が語られる。二人の関係がナルチーザの死で幕を閉じたことが序章で提示されることによって、語るべき物語自体は既に存在することとなり、それ故、作品の焦点の一つは語り的手法自体となる。「事実をまとめる以外しなかった」と序章で述べる語り手には、物語の実現者として物語を再構成する役割が付与される。そして作品中、語り手の採る視点はほぼ一貫して主人公ピエトロに据えられる。ピエトロの言動や心理は、外的に、時に自由間接話法を用いて内的に描写される。この点において語り手は、他の登場人物以上に主人公の情動を詳述することで、視点の安定した位相を示すこ

ととなる。他方、物語の情報提供者ライモンドが口にした言葉（「人間存在」、「心の神秘」）を語り手「私」が地の文で用いることによって、語り手自体の内部に作品上別の機能を有するはずのライモンドと「私」が混在する現象が生じる。このように、前二作品の課題であった語り手の性質が一部未整理になっているのが、本作品の語り手の特徴であろう。

またヴェルガは、作品後半の物語展開上重要な箇所となる第八章に主人公の恋人ナルチーザによる書簡体を挿入することで、物語の実現を語り手から奪う。書簡の中でナルチーザは、次第に心の離れていくピエトロからついには別離を切り出される経緯を記すと共に、自分が狂気へと陥っていく心情を吐露するのだが、ここには前二作品から継続する物語の全要素を描写しようとするヴェルガの意図が垣間見える。

このように『罪深き女』には、視点の一貫性を維持しようとする語り手と「全知の語り手」の相克が見られ、これが続く諸作品の語りの手法の探究の契機となっている。実際、後続作品においては、ヴェルガが直面した物語外部の語り手による複数の人物の内面描写の困難を解消するために主人公のモノローグを主体とする語り、次に主人公の友人「私」の視点からの語りが再度試みられ、最終的に『エロス』において物語外部の三人称の語り手が確立される。このように『罪深き女』は、後の没個性的語りで採られる三人称語りへの道程において探求される種々の語りの手法が試行された作品であり、ヴェルガの語りの手法の発展の萌芽となる作品であると言える。

宗教改革におけるカルニオーラ、トリエステ、フリウリの間の交流 ープリモシュ・トゥルーバルの生誕 500 周年に寄せてー

山本 真司 (東京外国語大学)

多くの側面で、フリウリが、文化的に現在のような姿を呈するようになったのは、トレント公会議以降の改革を通じてである。つまり、宗教改革とそれに対抗する反宗教改革の歴史を考慮することなしにフリウリの文化史を語ることはできない。

今年は、「カルニオーラのルター」と呼ばれるプリモシュ・トゥルーバル (1508～1586) の生誕五百周年にあたり、さまざまな記念行事が行われている (日本でも記念シンポジウムが行なわれた)。彼の活動範囲とその影響は、トリエステ、フリウリにも及ぶが、スロヴェニアでの彼の業績が目覚ましいものであるためか、一般にイタリアのプロテスタンティズムの枠外の問題と見なされているふしがある。

しかし、その思想形成は、特に彼を指導し保護を与えたトリエステの司教ピエトロ・ボノーモを介しての、イタリアの宗教改革者との交流に多くを負っている。してみると、イタリア北東部の文化的文脈において、プロテスタンティズムは、しばしば思われがちのように、「外からやってきたもの」である、と単純には決め付けられないように思われる。

トゥルーバルの業績はスロヴェニア語文化圏の形成に大きく貢献したため、(スロヴェニアは基本的にカトリック文化圏に属するにもかかわらず) スロヴェニアの民族意識の高まりとともに 19 世紀から注目を浴びてきた。したがって、トゥルーバルとボノーモの交流も良く知られたエピソードとなっている。となれば、この地域のプロテスタンティズムの問題は、イタリアの宗教改革の歴史のなかでも、いち早く研究の対象となってきたテーマの 1 つと言えそうである (トリエステをイタリアの一部と呼べるならばである)。

にもかかわらず、このようなカルニオーラ、トリエステ、フリウリの間の交流をイタリアの宗教改革の歴史の中に位置づけるという (イタリア側からの) 研究は、必ずしも確立したものとはなっていないようで、十分に深められているとは言えず、細部にわたってはまだ明らかにされていないことも多いようである。

慶長遣欧使節通訳兼折衝役 シピオーネ・アマーティ —手稿『日本簡略記』に見る宗教政治思想—

小川 仁 (京都大学)

シピオーネ・アマーティ (Scipione Amati) は、慶長遣欧使節がマドリッドからローマへ至る折、通訳兼折衝役として半年間使節一行に同行したイタリア人である。その人物像については、教会側に近い人物であった事、歴史家であったという事以外、生没年等詳しい事は解っていない。しかし、彼の手によって『日本奥州国記』 (*Historia del regno di voxu del Giappone*, 1615年)、手稿『日本簡略記』 (*BREVE RISTRETTO Delli tre' stati Naturale', Religioso, e Politico del Giappone*) といった著作が残されており、日本に対し並々ならぬ関心を示していた事が窺える。『日本奥州国記』は、アマーティが慶長使節一行との経験を基に著したもので、慶長遣欧使節や奥州国の事物等を伝えると、幾つか版が重ねられ、ドイツ語版も出版されるなど、当時のヨーロッパにおいて強い関心をもって迎えられた。『日本奥州国記』は、三十一章で構成され、前半は奥州国について、後半では使節一行と共にしたマドリッドからローマまでの経緯が述べられており、現在でも慶長遣欧使節を研究する上で、重要史料に位置付けられている。

しかしその一方で、現在ヴァチカン文書館に収蔵されている『日本簡略記』は、かねてよりその存在と内容は確認されていたものの、現在まで本格的に翻刻、翻訳された事はなかった。そこで本発表では、これを書きおこす事によって、その内容の分析と考察を試みたい。本著作は STATO NATVRAIE (博物誌) 12枚、STATO RELIGIOSO (宗教誌) 22枚、STATO POLITICO (政治誌) 45枚の合計 79枚、3部構成となっている。政治誌に全体の 57%割かれている事から見て、アマーティがこの著作をまとめた目的は、政治誌にあったと思われる。「博物誌」は分量こそ少ないものの、それに反比例するかのよう、地理、習慣、風俗、食生活、住居と大変多岐に渡った内容となっている。「宗教誌」では、内裏 (天皇) 発祥から仏教導入への経緯を述べた上で、宗教が日本の統治機構にどのように浸透したか詳しく論じている。その議論の際に、内裏を教皇 (Papa) のような頭目 (Presidente) であるとし、秀吉などの天下を支配する時の権力者、即ち將軍を皇帝 (Imperatore) と位置付けるなど、日本の政治と宗教 (神道と仏教) と

の関係を、ヨーロッパにおける政治とカトリックに置き換えて考えようとする傾向が認められる。「政治誌」では「宗教誌」における議論を踏まえながら、日本における政治状況を論じ、日本がタタールや中国、シヤム、ペギーなどの国々のように外部から侵略される事なく、不安定な政治状況にありながらも広範な統一政権が存在している事が、驚くべき事と評価し、一目置いている。

しかしながら、日本の統治機構を説明する際に、暴力 (violenza)、専制・暴政 (tiranno) という負のイメージが伴う単語を多用し、将軍による統治が、民衆を顧みない圧政へと繋がり、内裏の権力を形骸化した暴政であると示唆している。その結論としてアマーティは、上述した統治状況に鑑みつつ、「キリスト教を通して、世の中のこのような仕組みの摂理が保たれているという事が原則として理解される」といった統治におけるキリスト教至上主義を声高に主張するに至った。このようにアマーティの日本に対する眼差しは、あくまで政治に向けられ、彼が生きた同時代ヨーロッパの混沌とした政治状況の比較対象として、日本を捉えようとしていた事が窺える。その上で近代政治思想が勃興しつつあった17世紀前葉のヨーロッパにおいて、このようなアマーティの思想を考察する事は、非常に意義深いものと思われる。従って本発表では、以上に述べた事を踏まえつつ、日欧交流史、ヨーロッパ政治思想史の文脈から、アマーティの日本に対する具体的な関心及び思想を分析し、議論を進めていく。

「行為」としての美学と歴史

—ジョヴァンニ・ジェンティーレ再考—

鯖江 秀樹（日本学術振興会）

ここ十数年のあいだに、ジョヴァンニ・ジェンティーレ（1875～1944年）への評価は大きく変化した。とりわけ、イタリア・ファシズム研究、ならびに近現代思想史という二つの主要な分野で、彼を「ファシスト哲学者」として片付けてしまうことに留保が求められている。両研究におけるこの傾向の背景には、次のふたつの動機が存在している。ひとつは、近代性に対する根本的な問い直しである。さらに政治と美学との密接な関連性への注目を、第二の動機として挙げることができる。ヘーゲル以降の近代哲学に課せられた「主体の危機」という問題に立ち向かい、政治と美学、宗教がダイナミックに交差する地点を見定めようとしたジェンティーレの哲学は、こうした新たな視点で読み直されているのである。

この「ジェンティーレ再考」の気運に沿いながら、発表者はあえて、両大戦間期のイタリアというコンテクストのなかに、この哲学者を位置づけ直すことを試みる。従来の考えでは、この国の文化の形成において、ジェンティーレは、孤立した存在として捉えられてきた。この見方は、彼の哲学とファシズムとの同一化を助長してきた一方で、イタリア固有の文化的背景を過小評価するかたちで、ジェンティーレをフッサールやハイデガーといった同時代の哲学者と同列に扱う哲学史上の素地を提供することになった。本発表ではむしろ、イタリア文化に多大な影響を与えた二つの要素—ベネデット・クローチェおよびファシズムの文化政策—とジェンティーレとの「距離」を測定し直すことにしたい。

この作業を進めるにあたって、発表者は、ジェンティーレ哲学における「行為 (atto)」に照準を合わせる。彼の哲学の特異性は、「行為」の独特な解釈に由来する。事実、ベネデット・クローチェとジェンティーレを分け隔てるのは、「精神」というよりはむしろ、「行為」の捉え方であった。その意味で、両者はともにイタリア観念論の代表でありながら、まったく異なる思考軸を持っていた。それ以上に注目すべきは、クローチェとジェンティーレとが「決別」したのは、哲学が政治という実践領域で応用された時だ、ということであろう。1923年の「知識人宣言」は、両者の哲学的立場それ自体の対立でも、政治的立場の不和でもな

く、理論の使用をめぐる葛藤を刻印していたはずである。この点をふまえて本発表では、クローチェとジェンティーレが交わした書簡を手がかりに、「行為」の理論の使用をめぐる潜在的な緊張関係を浮き彫りにする。

次に検証するのは、理論の使用によって顕在化した不一致、すなわち「行動的観念論 (attualismo)」とファシズムの政治美学との微妙な距離である。ファシスト政府の要人として文化政策を推進するにつれ、ジェンティーレは、現実の政治体制と自ら提唱した「倫理国家 (Stato etico)」の理念とのあいだに、重大な食い違いがあることを自覚し始めていた。その深い溝は、文化的多様性についての議論と関係している。ファシズム文化の実体は歴史の引用からなる折衷的コラージュであった。このとき「行為」は、過去を現在においてに作用させること (in atto) を意味することになる。このことは、歴史も文化も宗教すらも思考行為の結果としてのみ生ずるという、ジェンティーレのテーゼと厳しく対立する。このようにジェンティーレのファシズムへの関与は実のところ、自らの哲学体系を基盤とする固有の「ファシズム観」が裏切られていく過程でもある。発表者はとくに、1920年代半ばの「共同体国家思想 (corporativismo)」をめぐる論争をもとに、この過程を描き出すことにする。

MEMO

A large rectangular area with a wavy border, intended for writing a memo. The border is a simple, repeating wave pattern. The interior of the rectangle is completely blank, providing space for text.

MEMO

A large rectangular area with a wavy border, intended for writing a memo. The border is a simple, repeating wavy line that frames the central space. The interior of the rectangle is completely blank, providing a clear area for text.

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部 南欧語南欧文学研究室内
Tel. (03)5841-3851 Fax (03)5802-8870
E-mail: studiit@l.u-tokyo.ac.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/astig/>